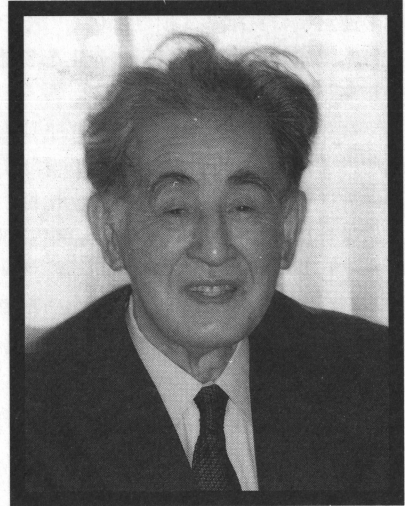


和達清夫先生のご逝去を悼む

名誉会員和達清夫先生は平成7年1月5日に逝去されました。その前日までお元気に過ごされておられたと伺い、誠に痛恨の極みでございます。92歳のご長寿を全うされた大往生ではございますが、まだ私ども後輩がご指導を仰ぐことも少なくなかったとの思いで一杯でございます。

先生は大正14年に東京帝国大学理学部物理学科を卒業され、直ちに中央気象台地震掛に勤務されました。先生は物理学の研究を志しておられた大学在学中に東京で関東大地震に遭遇され、その悲惨な災害を目のあたりにされたことが、気象台に就職される動機であったと著作の中で述べておられます。長年にわたる先生の中央気象台と気象庁在職時代における偉大な業績は深発地震に関する一連のご研究に始まっていると承っております。先生はこの世界に誇る地震学研究のご業績により若くして学士院恩賜賞を受賞されました。「和達ゾーン」や「和達ダイアグラム」などの学術用語によって先生の業績は未長く後世に伝えられます。これらの地震関係の論文は昭和1桁の時代には気象集誌に掲載されていることを気象学会創立100周年記念式典(昭和57年5月25日)の先生の式辞の中で述べておられます。その後先生を中心とする地震予知の推進への提言が今日の地震防災体制の整備に繋がっていることを思い起すと、自然災害の防止を目指した先生の一生は地球科学を対象とする本学会の進むべき道を示唆しているといえましょう。

先生はその後、大病を克服されて戦時下の国内・国外の気象事業の運営に尽力され、戦後の困難な時代に中央気象台長に就任され、その後初代気象庁長官として、昭和38年に退官されるまで、気象事業の復興と一層の発展に尽力されました。この間、戦後の荒廃した気象官署の復旧、行政整理など終戦直後の困難な諸問題の処理を指導されて今日の気象事業の基礎を築かれました。さらに、昭和27年に公布された気象業務法の制定に尽力され、昭和28年には世界気象機関への加盟を達成されて、困難な国際環境のなかで日本の気象事業の国際化の推進に尽力されました。また、昭和31年



には中央気象台から防災行政機関としての気象庁への昇格を達成されて、その後7年間気象行政の充実に取り組まれました。その主なご業績を回顧いたしますと、日本で最初の電子計算機の導入による数値予報の開発、国際地球観測年に南極昭和基地を含むオゾン観測網の整備などの気象観測の充実、気象レーダー観測網の整備、海洋観測船凌風丸の深海観測装置の整備と黒潮国際共同観測の推進など今日に引き継がれる数々の事業など枚挙に暇がありません。このように先生の中央気象台と気象庁ご在職の39年間は気象業務の近代化の歴史でもありましたが、これは先生の卓抜した指導力と先見性のある洞察力によって達成されたものと申しても過言ではないと思います。

先生は気象行政にその半生を捧げられましたが、それ以外にも多方面で活躍されました。昭和24年には学士院会員に推挙され、昭和49年から2期6年間院長として同院の運営に携わり、わが国の学術全般の発展に貢献されました。また、先生は昭和30年より南極地域観測統合推進本部委員としてわが国の南極観測の推進に貢献なさいました。さらに昭和35年から3年間、日本学術会議会長として活躍されました。気象庁ご勇退後には、初代の国立防災科学技術センター長、中央公害対策審議会会長、埼玉大学学長、日本学士院院長などを歴任され、科学技術の振興、防災科学技術の向上、

公害防止・環境保全、教育など広範な分野で精力的に活躍されました。

日本気象学会の会員としては最長老として今日までご指導いただきましたが、先生は昭和24年から30年まで理事長として、またその後も理事あるいは評議員として学会の運営にご貢献して頂きました。そのご功績によって日本気象学会は昭和44年に先生を名誉会員に推挙いたしました。

このような数々のご功績によって、先生は昭和46年には文化功労者になられ、翌47年には勲一等瑞宝章を、昭和51年に放送文化賞、同57年に交通文化賞、同60年文化勲章の榮譽に輝かれ、また60年には東京都名誉都民になりました。この他、昭和56年にはアメリカ地震学会賞を受け、私どもは改めて先生の地震学研究におけるご業績を再認識いたしました。先生は上述のご

業績とは別に、多くのご趣味を楽しまれましたが、なかでも酒脱で軽妙な座談は先生を囲む者を愉しませてくださいました。また、折りに触れて発表された随筆は仕事関係の平易な解説から、自らも楽しまれた野球のこと、結核闘病生活や同病者との交流など、先生の豊かな人間性がにじみでております。また、気象の事典や海洋の事典を監修され、この方面の知識の普及にも尽力なさいました。

今、突然の先生の逝去は私どもに大きな悲しみをもたらしましたが、この悲しみを乗り越えて気象学の発展と自然災害の防除に努め、先生のご遺志を引き継いで進むことをお誓いいたします。

先生のご冥福を心からお祈り致します。

(日本気象学会理事長代理 関口理郎)

(現在多数の方々に和達先生の思い出などを執筆していただいております。まとめ次第「天気」に掲載致します。編集委員会)

故和達清夫氏略歴

生年月日 明治35年9月8日(92歳)
 出身地 愛知県名古屋市
 学歴 大正14.3 東京帝国大学理学部物理学科卒
 昭和7.3 東京帝国大学より理学博士の学位授与
 顕彰 昭和7.5 恩賜賞
 昭和46.11 文化功労章
 昭和47.11 勲一等瑞宝章
 昭和56.3 第5回米国地震学会賞
 昭和57.11 交通文化賞
 昭和60.11 文化勲章
 略歴 大正14.4 中央气象台任官
 昭和18.3 大阪管区气象台長
 昭和18.12 満州国中央観測台長
 昭和20.7 中央气象台予報部長
 昭和21.3 中央气象台総務部長
 昭和22.3 中央气象台長
 昭和24.1 日本学士院会員
 昭和31.7 初代 気象庁長官
 昭和38.3
 昭和35.1 日本学術会議会長
 38.1

- 昭和38. 4 国立防災科学技術センター所長
41. 8
昭和41. 8 埼玉大学学長
47. 8
昭和49.10 日本学士院長
55.10
昭和42.12 中央公害対策審議会会長
63. 2
昭和50.10 科学技術庁顧問
平成3. 9
昭和54. 6 国土審議会委員
63. 5

現 在 (財)日本環境協会会長 (昭和54. 9～)
埼玉大学名誉教授 (昭和47. 9～)

功績概要

- ① 昭和7. 5 「深処に発生する地震に関する研究」で学士院恩賜賞授与
- ② 中央気象台長及び気象庁長官として
(昭22. 3～38. 3)
昭27. 6 気象業務法の制定
昭28. 9 世界気象機関加入
昭29. 9 気象レーダーの設置
昭31. 7 気象庁の外局昇格
昭34. 3 電子計算機による数値予報の導入

など技術の近代化を図った

- ③ 国立防災科学技術センター所長として
(昭38. 4～41. 8)
同所の創設にあたり防災科学の充実につとめた
- ④ 埼玉大学学長として (昭41. 8～47. 8)
教育に尽力した
- ⑤ 此の間、日本学術会議会長として
(昭35. 1～38. 1)
又、昭和24. 1 日本学士院会員となり同院幹事を経て同院長に選出され (昭49. 10～55. 10) 2期6年間同院の運営にあたるなどわが国学術全般の発展に多大に貢献があった
- ⑥ さらに、数多くの審議会委員を務め、環境庁中央公害対策審議会会長 (昭42. 12～63. 2)、科学技術庁顧問 (昭50. 10～平3. 9) 及び国土庁国土審議会委員 (昭54. 6～63. 5) として、行政運営に貢献している

主な著書

気象の事典 (東京堂出版)、海洋の事典 (東京堂出版)、地球と人 (岩波書店)、雨・風・寒暑の話 (NHK 出版協会)、青い太陽 (東京美術社)、地震の顔 (自由現代社)、病とたたかう (国書刊行会)

(気象庁 広報室提供)